

## 「あはれ」の主題を騙る文学

— 『竹取物語』の〈語り〉と〈言説〉再検討 —

東原 伸明

(平成十年十一月三十日受理)

## 1 演出された「あはれ」の主題

『竹取物語』は、「あはれ」を主題とする、「あはれ」を語る文学なのであろうか。

たしかに、かぐや姫は最後に帝に宛てた手紙の末尾に、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

(新潮日本古典集成 富士の煙 81-82頁)

という歌を残している。この「あはれ」は、五人の求婚者のひとり、自分のために生命を落とした中納言石上麿足に同情して発せられた感情、

かぐや姫、少し(あはれ)と思しけり。(燕の子安貝 57頁)

と「内話文」で叙述されて以来、異人かぐや姫が獲得したきわめて人間的な感情であるとする見解に対して異論はない。神話から物語文学へという発展史観の視座から『竹取物語』の主題を説く高橋亨は、次のように述べている。

天の羽衣を着て人間的感情を失うまえに、帝に歌を贈ったかぐや姫は

「あはれ」という。それは天人に理会できない心であり、「物知らぬこと、なのたまいそ」といったとたんに、かぐや姫の人間化した心をとおして、地上の情愛が宿命的に肯定されたのである。／月世界の永遠性から地上の虚偽と醜悪を照射し、その汚濁の中から人間の「あは

れ」の美しさを発見したところに、この物語の主題的な核がある。羽衣型の話型と難題求婚譚を物語する表現の転位をとおして「あはれ」が結晶したことは、民間伝承レベルと全く異質であり、あらゆる典拠論とかがわらない。<sup>(1)</sup>

神話や昔話(民間伝承)の類型と『竹取物語』という物語文学との差異をそのように「あはれ」の主題の有無から高橋は説いたのであり、最近、表現レヴェルでの生新な文学史の構想を模索する高田祐彦も、この『竹取物語』の「あはれ」から『源氏物語』の「あはれ」へと直結した主題の關係性を指摘している。<sup>(2)</sup>

しかし、この「あはれ」をもって、『竹取物語』の主題・本質とするのには、私は些かの抵抗と躊躇いを覚えるのである。それは、『竹取物語』の文学性・虚構性を高橋や高田が説くように、そんなに素直に受け止めてしまつて本当に大丈夫なのだろうかという危惧を抱いているからである。この物語は風刺とアイロニーに富んでいるから、その主題も直截に提示されてはいないにちがいない。「あはれ」の主題じたいも、捻りが加えられ演出されているのではないのかと推察されるからである。したがって、「あはれ」の有無よりも、それがどのような経緯を経て提示されているのかを言説的な分析を通して検討してみる必要があるだろう。

かぐや姫の昇天の後、帝は彼女からの手紙を見て、

披げて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、ものもきこしめさず、御遊びなどもなかりけり。  
(富士の煙 83頁)

とあるように、たしかに「あはれ」がったし、その後、翁・姫、血の涙を流して惑へど、かひなし。あの書き置きし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか、命も惜しからむ。誰がためにか。何事も、用なし」とて、薬も食はず、やがて起きも上がらで、病み臥せり。  
(同頁)

と翁・姫の悲嘆も描かれていた。だが、それだけである。天皇の臣民は、かぐや姫の昇天をこぞつて悲しんだらうか。そのような叙述がなされてないのは、なぜだらうか。悲しんだに決まっているからか、当然だからか。果して、そんなことがたしかに言えるのだらうか。などと言うと訝る向きもあるだらうが、この点我々読者は、錯覚を起こしてしまっているのではないのか。私見では、悲しんだのは帝・翁・姫のほかは、

使はるる人々も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなど貴やかにうつくしかりつるを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。  
(天の羽衣 72頁)

とあるように、せいぜいがところ彼女の身辺の世話をしていた侍女たちくらいのものであったらうと推察される。勅使の少将高野大国に指揮された皇軍、「六衛の府あはせて二千人」(同74頁)の兵たちは、果して悲しんだらうか。

「国王の仰せごとを、まさに、世に棲み給はむ人の承り給はでありな  
んや」  
(御狩のみゆき 60頁)

と、内侍中臣房子が説いた王権の論理のとおり、勅命だから職務に忠実に  
かぐや姫の昇天を阻止しようとしたにすぎないのではないのか。彼らは職  
務を全うできず、高野大国の面目は丸潰れでさぞ遺憾だったらうが、誰一

人として彼女の昇天を悲しんだ者などいなかたにちがいない。なぜならば、後述するように彼女は地上Ⅱ「この世」という共同体にとって存在してはならないもの、存在悪だからで、皆、これでもやく厄介払いができたと安堵し、心の中では、むしろ喝采を博していたのではないかと思われるからである。

かぐや姫の手紙に「あはれ」がった帝は、物語の末尾でかぐや姫がこの世に残していった「不死の薬」と「御文」を富士山頂で燃やすよう勅命を  
発している。

御文、不死の薬ならべて、火をつけて燃やすべきよし、仰せ給ふ。そのよし承り承りて、士どもあまた具して、山へ登りけるよりなむ、その山を「富士の山」とは名づけける。／その煙、いまだ雲の中へ立ち昇る」とぞ言ひ伝へたる。  
(富士の煙 84～85頁)

この結末について前記高田祐彦論文は、《かぐや姫との別離の嘆きは、古代の帝王誰しもが望んだ永遠の命によっても癒されないほど深いのである。換言すれば、不死の薬を燃やし、あらためて自ら命に限りのある人間であることを選ばねば、嘆きと執着に耐えきれないのである。立ち上る煙に象徴される帝の嘆きと執着は尽きることがない、というのが、物語の結びである》とする。

この高田の見解は、現行の注釈書が一致して提示している通説の線上に構築されたきわめて常識的な意見なのだが、近年、こころした近代的な人間中心主義ヒューマニズムに則った論に対して、三谷邦明や小嶋菜温子からは異見が提出されている。両者の見解は、かぐや姫の地上からの排除を説く点で一致しており、小稿もそうした見方を支持する立場から、次にかぐや姫の帰郷理由について検討してみることしよう。

## 2 話型の転換とかぐや姫の帰郷Ⅱ「龍宮童子」譚の期待の地平

ふつう、かぐや姫の帰郷という場合、天人の中の「王とおほしき人」が竹取の翁に向かつて語った、

「かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限り果てぬれば、かく迎ふるを、……」

(天の羽衣 78頁)

ということばによると思われている。かぐや姫は天上界で何か罪を犯し、その刑罰として地上に排除され、今また贖罪の完了によつて帰郷するといふのだ。この説明は、物語の聞き手に、そしてこの物語を読む現実の読者に、かぐや姫の帰郷理由を貴種流離譚の話型に沿つて理解すべきことを、そうとは意識させずに強要している。だが、しかし、この説明は、かぐや姫の帰郷理由の半分しか説明したことにならないだろう。それというのも、あくまでもこれは物語の舞台裏、この時点において初めて種明かしされた天上の側の都合を、論理として説いているにすぎないからである。あとの半分というよりも、むしろ物語の進行する地上こそ表舞台だ。貴種流離譚(異郷訪問譚)とは鏡像の関係にあるのが、小さ子譚・天人女房譚(異人訪問譚)なのであり、それこそが地上の側の論理を表出する話型であることを忘却してはならない。

その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。(かぐや姫の生ひたち 9頁)

と、翁の内声(一人称・独白)と語り手の声(三人称・対話)が二声的に交響する「自由間接言説」で表出されているように、(語り)の視点は物語の始発から一貫して地上の側にあるのだから、あくまでも主は小さ子譚・天人女房譚の方にあるのであり、貴種流離譚は従にすぎないのである。

にもかかわらず、『竹取物語』という文学は従にすぎないはずの貴種流離譚を主として読むように強要する。主―従の関係が逆転している。つまり、『竹取物語』の(語り)は、(騙り)なのであって、かぐや姫の帰郷を語る時点において、話型を切り替え転換しているのである。『竹取物語』を無自覚に貴種流離の論理で読んでいる読者は、まさにこの(騙り)の罠に嵌まってしまっているのである。そして「あはれ」の主題もまた貴種流離の話型が導き出したものであって、その規制力によつて、そのように誤読させられているのだということを実は自覚すべきなのである。

ところで小さ子譚・天人女房譚とは、どのような話型なのか。この話型は、異人が異郷からこの世を訪問し、一時的にこの世に留まるが、結局は異郷に帰還してしまふ話(異人訪問譚)である。これを『竹取物語』に当て嵌めてみると、翁がかぐや姫と出逢い(異人邂逅譚)、そして次に、

翁言ふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中にあはするにて知りぬ、子(龍)になり給ふべき人なんめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。(同頁)

と、翁がかぐや姫をわが家に連れ帰ってしまった時点で、すでに結末の別離Ⅱ帰還は約束されていたことになるのだ。それは三谷邦明の一連の竹取物語論が明らかにしているように、異人をこの世に留めるといふ翁の行為は禁忌の侵犯を意味しているのであり、『竹取物語』を(読む)ことは、常に深層においてかぐや姫の異郷への帰還の可能性を認識しながら、それが遅延され、裏切られる様相を把握して行く事であり、その遅延に一喜一憂することに他ならないのである<sup>(4)</sup>。

そのような話型の先取りの・型取りの機能と読者の期待の地平という点では、昔話の「龍宮童子」の話と『竹取物語』が意外に重要な関連性をもっていることに気づかされるのだが、高橋亨は、その一端を説いた拙稿の主旨を汲み取れず次にようなのはずれな批判をしている<sup>(5)</sup>。

『竹取物語』の基本構造は、「羽衣型」に求婚譚（五人の難題求婚譚十帝の求婚譚）をはめこんだものである。『竹取物語』の冒頭には小さ子譚や致富長者譚を読むことができるから、前記の東原論文が例示するような「龍宮童子」と同一の話型と読む説も生じうる。「龍宮童子」はしかし「浦島型」の話型に含みうる。東原の例示は、小さ子譚や致富長者譚の素材に注目したもので、私のいう話型レベルとは異なるし、肯定するわけにはいかない。<sup>(6)</sup>

高橋亨は「龍宮童子」譚を、『浦島型』の話型に含みうる』という一義的な理解をしているのだが、それは登場人物の男の側に焦点を合わせた読みをした場合だけである。主人公の龍宮童子にとってそれは、「浦島型（異郷訪問譚）」と鏡像の関係⇨相互互換の相似形に相当する「羽衣型（異郷訪問譚）」になるはずである。つまり、男はこの世から龍宮城へ行き乙姫から童子を貰い受けこの世に戻ってくるのだが、童子もまた、男に連れられてこの世にやってきて一時的にこの世に留まるが結局は龍宮城に帰ってしまうのだ。ゆえに、「龍宮童子」譚は少なくとも二つ以上複数の話型が複合したところに成立する話なのである。それを無自覚に「浦島型」と一義的に規定してしまったのが高橋の近代合理主義の思考なのであり、拙稿は、まさにそうした思考方法を批判対象としてもいた。また拙稿が、昔話の《素材に注目したもの》だとするのも高橋の事実誤認で、拙稿は、話型を物語文学との対話⇨読みのレヴェルで論じており、素材論ではない。だからこそ、「創造的誤読」というタームを用いたのである。少なくとも、高橋のように話型の枠組みを問題とするような視座、閉じられた系の内部を腑分けするような非生成的な思考とは一線を画していることだけは、ここに明記しておきたい。冒頭に引用したように、高橋亨の立場は「あはれ」という主題の有無でジャンルの規定を試みたところに特徴がある反面、『あらゆる典拠論とかかわらない』と宣言し、物語文学というジャンルじ

たいを孤高・孤絶したものと捉えてしまったために、昔話などはそれより劣ったものとして思考の内から排除し、重ね合わせ関連させて読むということができなくなってしまうのである。

さて、「龍宮童子」譚に代表される小さ子譚は周知のように、

(1)小さ子譚 → (2)致富長者譚

という連動性が認められ、『竹取物語』においても、

・竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔てて

よごと、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうやう

豊かになりゆく。

・翁、竹を取ること久しくなりぬ。勢ひ猛の者（⇨もの）になりけり。

(同10頁)

と、竹取の翁もかぐや姫という小さ子⇨異人を獲得したことによって長者になっている。だから、「子（⇨籠）になり給ふべき人なんめり」という洒落は翁の（騙り）なのであって、レトリックを駆使してまでも異人を手に入れたがったのは、彼がこの二つの話型の連動性を知っていたからにほかならない。そこに翁の欲望を読むことも十分可能である。つまり、『竹取物語』は、その成立時における口承文芸の話型を引用⇨パロディ化しているわけである。しかし、「桃太郎」や「一寸法師」などは異なり、「龍宮童子」譚はそのまま大団円では終わらない話型なのである。すなわち、

(1)小さ子譚 → (2)致富長者譚 → (3)長者没落譚

というように、長者となった男が零落してゆく話、破局に連なる話型であるところに特徴があるわけである。昔話では富貴になった男が慢心して異人の扱いが粗略になったり、禁忌を犯したりなどして異人を手放すことを契機に没落してゆくことになっている。『竹取物語』もこの話型の切り拓く期待の地平に沿って、竹取の翁の本音と建前とが「会話文」によって透け見えるように交互に語られてゆく。

「この女、もし奉りたるものならば、翁に爵を、などか賜はせざらむ」翁、喜びて、家に帰りて、かぐや姫にかたらふ（Ⅱ騙らふ）やう、

「かくなむ、帝の仰せ給へる。なほやは仕うまつり給はね」と言へば、かぐや姫、答へてはいはく、「へもはら、さやうの宮仕へ、つかうまつらじ」と思ふを、しひて仕うまつらせ給はば、消え失せなむ。御官爵つかうまつりて、死ぬばかりなり（御狩のみゆき 61〜62頁）

「今は昔、竹取の翁といふものありけり」、「勢ひ猛の者（Ⅱもの）になりけり」と、彼は「地の文」では一貫して語り手から「人」以下の「もの」と蔑視されてきた存在であるから、爵位と交換に異人の娘を宮仕えに差し出せという帝の提案は、翁にとってたいへん魅力的なものであったにちがいない。しかし、育てた恩を笠に親権を振りかざしてきた彼ではあったが、否、それ故に義理とはいえ、わが子とわが身の栄達とを引き換えにしたいとは、さすがに正面切つては言い出せず、かぐや姫の強硬な姿勢を前にしては、

・「なし給ひそ。官爵も、わが子を見たてまつらでは、なににかせむ」

（62頁）

・「天下のことは、とありとも、かくありとも、御命の危きこそ、大きな障りなれば、なほかう、仕うまつるまじきことを、参りて申さむ」

（63頁）

と、「会話文」による建前に終始せざるをえないのだ。しかし、その舌の根も乾かぬうちに、もう彼は帝と談合しているのである。狩りに託つて翁の家に行幸をしつつでにかぐや姫の素顔を見てしまおうという帝の提案に、

「いとよきことなり。なにか、心もなくて侍らむに、ふと行幸して御覽ぜむに、御覽ぜられむ」

（64頁）

と、一も二もなく賛成してしまう。父親が娘の居所へ男を手引きするの

あるから、成功しないはずはない。かぐや姫にしてみれば、背中から不意に撃たれたようなものである。翁は、まったく信用のおけないとんでもない養父なのだ。

誤解を恐れずに、この話型の切り拓く期待のさらにもう一歩先を踏み出して述べてみるならば、かぐや姫昇天にあつての翁の悲嘆のことばも「会話文」で表出されているかぎり、額面どおり親子の情だとはかりも言えないようである。

「こは、なんでふことのためふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、何人か迎へきこえむ。まさに許さむや」と言ひて、「われこそ死なぬ」とて、泣きののしること、いと堪へがたげなり。

（天の羽衣 71〜72頁）

傍線部も恩着せがましい発話であり、前に「地の文」で「三寸ばかりなる人」と語られていたように、「菜種の大きさ」は明らかに誇張であつて、彼がこの期に及んでまだ養育の労を強調し父権を行使しようとしているところを見ると、彼が悲しがっていたのはわが子の喪失だけが理由ではなくて、異人の喪失→富の喪失という長者から元の貧しい竹取りという社会的地位に転落してしまうことを恐れていることではなかつたか。長者没落譚の引用Ⅱパロディと読めてしまうのであり、翁の発話Ⅱ「会話文」は、〈騙り〉として割り引いて理解せざるをえないのである。いちど豪奢な生活を覚えてしまった者が、没落してまた困窮した生活を続けてゆくのは辛いことであろう。翁夫婦が不死の薬を拒んだのも、わが子を喪失した悲しみの表現という常識的な理解と同時に、貧しいままで死ぬこともできず永遠に生き続けなければならぬことを拒否したのだという解釈もできるのである。昔話の話型が切り拓く期待の地平Ⅱ想像力からは、以上のような竹取の翁の欲望に沿った読みも十分に可能なのである。

## 3 かぐや姫の帰郷Ⅱ排除の論理と王権侵犯の回避

もつとも、かぐや姫の帰郷の理由は、そんな竹取の翁の人格や彼の思惑とは別に、彼女自身の存在そのものにあつたのだとも言えるのである。彼女は、天上において罪を犯したことにより流刑として地上へ排除された異人である。彼女は、その異人性ゆえに、今度は地上の秩序と制度を次々と侵犯してゆくことになる。それは、異常誕生・異常成長・結婚の拒否による家門の断絶・異郷の宝物要求という達成不可能な難題・五人の廷臣の破壊・宮仕えの拒否・不死の薬の実在 e t c . . . 。

異人の尺度によつてこの世の秩序と制度は問い直されているのだが、『竹取物語』の構造・機能に、追讎の儀式の類比アナロジーを読む三谷邦明は、かぐや姫はこの世の人々に秩序を与えるために贖物として物語の中呼び込まれ、かつ追放排除されなければならない存在である由説いている。三谷は、三善清行の『意見十二箇条』や『延喜式』卷十六陰陽寮式所載の「追讎の祭文」を資料に掲げて、『この陰陽師の祭文の「穢悪疫鬼」がかぐや姫で、富士山で不死の薬や手紙を焼くことは、「五色の宝物、海山の種種味物を給ひて罷賜ひ、移し賜ふ所所方方に急に罷往ねと追給ふと詔るに奸心を挟んで留りかくらば、大讎公小讎公、五兵を持ちて追走り、刑殺物ぞと聞き食ふと詔りたまふ」行為であつた』として、だから帝は、『東方陸奥、西方遠値嘉、南方土佐、北方佐渡よりおちの所』、「日本」ではない「月の都」に、かぐや姫を駆除しなければならなかつたのだ』と説いている。また帝を「あなた」と二人称で呼びかけ詰問する三谷は、物語の末尾でかぐや姫がこの世に残していった「不死の薬」と「御文」を富士山頂で燃やすよう勅命を発したことについて、『あなたが、かぐや姫の文を見て「食国」さえ忘却して熟慮して得た結論は、異人の物はすべてこの世に残して置いてはいけないということだつた。天皇制を拒否する者の痕跡は、一つであ

ろうと残存するならば、あなたの地位は崩壊するのだ。だから、「士どもあまた具して山へのほり」という消費さえ辞さずに、異郷に属するものを燃やしたのだ』と述べている。かぐや姫の喪失に対する帝の嘆きの表現と受けとめる通説の単純さに比して、三谷論文は、感情と行動が食い違ふ帝の、複雑な胸中を浮き彫りにしているわけである。小嶋菜温子も独自に韓国の民俗資料などを引いてかぐや姫を崇り神や御霊の位相から捉え、崇り↑鎮魂の擬制的な論理から説いており、その点では三谷の見解と一致していると言えよう。

贖罪の完了による帰郷が天上の側の論理であるならば、この世の秩序と制度の侵犯による第三項排除(9)、それが地上の側におけるかぐや姫の帰郷の論理である。天上から地上へ排除された異人が今度は、地上の秩序と制度維持のために天上に向け再度排除されたというわけだ。

だが、これですべて問題が解決してしまつたわけではない。いつ月の都に帰郷Ⅱ排除されてしまつてもよかつたはずのかぐや姫ではあるが、それがなぜこの時点にまで引き延ばされ、かつこの時点においてなされたのかという最も肝心な問題は依然残されたままである。先行する三谷・小嶋論文は、排除という点で先駆的ではあるが、この点に関しては何も答えてくれていない。この時点における排除の理由は何か、以下それを検討してみよう。

・「帝の召してのたまはむこと、(かしこし)とも思はず」

(御狩のみゆき 59頁)

・「国王の仰せごとを背かば、はや殺し給ひてよかし」 (同 60頁)

かぐや姫が帝と対峙する時点において、彼女の王権の叛逆者、王権を侵犯する者としての像がクローズアップされてくることに注目したい。

一筋縄ではゆかぬ性格とみた帝は、叙爵を条件に翁を抱き込み、狩の行幸に託つて強引にかぐや姫に構あつてしまおうとする。

帝、にはかに日を定めて、かぐや姫の家に入り給ふて、光満ちて、けうらにて居たる人あり。(これならむ)と思して、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎてさぶらへど、初めよく御覧じつれば、類なく、めでたく覚えさせ給ひて、「ゆるさじとす」とて、率ておはしまさむとするに、……

(同 64頁)

帝は光輝くかぐや姫の素顔を、まさに見てしまったのだが、この場面に ついては高橋亨の分析がある。<sup>(10)</sup>《見るものが所有を意味すること、男に見られた女が、見た男と結婚するというのが古代からの発想であり、かいま見(かいはみ)の類型として源氏物語などにも強く繰り返されていることを想起したい》として、高橋は、《かぐや姫はじかし、古代の類型に反して、見た帝のものにはならなかった。より正確にいえば、心は与えなければ、身体は与えなかった》と結論づけているが、この見解に従ってよいものだろうか。

権力を行使して、強引に宮中へ連れ去ろうとする帝に対しかぐや姫は、「おのが身は、この国に、生まれて侍らばこそつかひ給はめ、いと率ておはしがたくや侍らむ」

(同頁)

と言い、「きと影になりぬ」という非常手段に訴えた。古語「影」は、「光」の謂であり、彼女は、人の手では捕らえられない光と化してしまつたのだ。いくらこの世の最高権力者といえども、支配する領域の外に光の世界までは力の及ぼし方がない。

《はかなく口惜し》と思して、《げにただ人にはあらざりけり》と思して、「さらば、御供には率て行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫、もとのかたちになりぬ。帝、なほめでたく思しめさるること、せきとめがたし。

(同 65頁)

傍線部を集成頭注一六は、《帝に関することであるが、述語が形容詞な

ので、敬語が表面に出ない》と説明するが、正鵠を射ていない。これは、ただの「地の文」ではないのだ。その直前に位置する「思しめさるること」「思す」と呼応して、「自由間接言説」なのである。「せきとめがたし」には、この場面を語る語り手の声(三人称・対話)に、帝の内声(一人称・独白)が交響しており、帝がかぐや姫の「もとのかたち」にすっかり魅了されてしまつておられることを、「地」を通して叙述しているのである。そして、帝、かぐや姫を留めて帰り給はむことを、あかず口惜しく思しけれど、魂を留めたる心地してなむ帰らせ給ひける。

(同頁)

とある。してみると、前記高橋亨論文の分析、かぐや姫は素顔を見られた帝に、《心は与えなければも身体は与えなかった》という認識には、遺憾ながら異を唱えざるをえない。小稿の冒頭に掲出したように高橋は、かぐや姫が獲得した「あはれ」という感情をもつて、帝に《心は与えた》とするのだが、それは短絡的な思考というものでないのか。むしろ逆なのであつて、心魂を与えてしまつたのは帝の方である。この点見落としてはなるまい。帝は、光輝くかぐや姫の素顔を見てしまった。そのことにより逆に眩惑され、すっかり彼女に心魂を奪われてしまった。虜にされてしまつた。彼は彼女に逢う前、《この女のたばかりにや負けむ》(61頁)という決意を固めていたのだが、それは脆くも崩れ去つてしまつた。かぐや姫の光は、王権の主宰者の心を惑わすカリスマの光なのだ。帝は帰宮した後も、かぐや姫のことが忘れられない。

常に仕うまつる人を見給ふに、かぐや姫の傍らに寄るべくだにあらざりけり。(こと人よりはけうらなり)と思しける人の、かれに思し合はすれば、人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みし給ふ。よしなく御方々にも渡り給はず。かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給ふ。御返り、さすがに憎からず聞こえ交はし給ひて、おもしろく、木草につけても御歌を詠みてつかはす。

帝とかぐや姫の良好な関係、微笑ましい状況が描かれている・・・などと、甘く読むべきところではなからう。これは、さりげなくではあるが、由々しき事態を語っているのである。帝の宮仕えの要請を拒否し続けるかぐや姫の存在が、帝をして彼女以外の女を〈性〉の対象として愛せない男にさせてしまっている。帝の心Ⅱ魂は、かぐや姫の素顔を見てしまつて以来、ずっと彼女に惹きつけられたままなのだ。

「常に仕うまつる人」について、角川鑑賞日本古典文学脚注一四（185頁）は、《常に帝のお側に奉仕申し上げる女。あとの脚注二〇の「御方々」とは異なり、帝の身のまわりの世話を申し上げ帝の情けも受ける女性で、下級（地方官出身）の更衣級。かぐや姫もこの女性の一人として迎えられるはずだったのである》とし、同脚注二〇は、「御方々」を《御妃たち。后や女御》とする。

古代的な帝王は、一般にその存在したいが小宇宙として、〈宇宙の中心〉に象徴される。そこから周縁に向け彼の身体から放射される徳の呪力によつて、大宇宙は秩序化されるのである。ゆえに帝王である彼は、性生活においても呪力の実践として奔放に振る舞うことで、自ら豊穡を体現することが義務づけられていたのである。その彼の「独り住み」は、天つ日嗣Ⅱ皇統の断絶につながる由々しき事態だと言えよう。したがって、ここは王権の危機的な状況を意味していると読むべきなのである。

かやうにて、御心を互ひに慰め給ふほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりももの思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。……

（天の羽衣 68頁）

この後、かぐや姫の素姓が明かされる叙述が続き、八月十五夜に迎えが

（66―67頁）

来て昇天という構成である。帝がかぐや姫ゆえに「独り住み」を始めてから「三年」。むろん、この「三」という数字じたいは、この物語冒頭以来繰り返されてきた神聖数だから特別な意味はなからう。しかし三年の間、帝から放つておかれた「御方々」およびその外戚たちが、黙って見ていたとは考えられないし、異常事態に世間も騒ぎ出していたことであろう。にもかかわらず、物語は、そうした一切を黙してまったく語っていないのだが、帝がかぐや姫と親密になった分、外戚との関係は険悪なものとなっていったことと推察される。それが、「三年」という年月の内訳である。そして、おそらく両者触発の危機的な状況・・・もうこれ以上帝とかぐや姫の関係を語つてゆくことができないというぎりぎりのところで、

・かぐや姫、泣く泣く言ふやう、「さきさきも申さむ」と思ひしかども、  
 〈かならず心惑はし給はむものぞ〉と思ひて、今まで過ごし侍りつる  
 なり。〈さのみやは〉とて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この  
 国の人にもあらず、月の都の人なり。それをなむ、昔の契りありける  
 によりてなむ、この世界にはまうで来たりける。今は帰るべきになり  
 なければ、この月の十五日に、かの故の国より、迎へに人々まうで来  
 む。さらずまかりぬべければ、思し嘆かむが悲しきことを、この春  
 より、思ひ嘆き侍るなり」と言ひて、いみじく泣くを、……

（同頁）

というふうには、貴種流離の話型が突出してきて小さ子・天人女房の話型と転換され、「あはれ」の主題を語るⅡ騙るとともに、かぐや姫は贖罪完了の名目で帰郷する。『竹取物語』は彼女を月世界に排除することによって、結局王権侵犯から王権瓦解の危機的状況を回避したというわけである。だが、しかし、物語はその点を隠蔽してしまっているのだ。

そして、この危機的な状況設定がそのまま『源氏物語』『桐壺』巻頭の混乱状況、宮廷の身分秩序を侵犯する男女の異常な愛情として主題化され



ているのである。宮仕えを拒否したにもかかわらず、王権の主宰者の心<sub>II</sub>魂を魅惑し虜にしてしまった異人かぐや姫。その彼女を現世に転生させ入内を敢行してしまった。桐壺の更衣こそは、現世のかぐや姫だ。宮仕えを拒否し帝との性的関係を結ばなかった前世のかぐや姫は、当然のことながら子を残すことなく異郷に去ってしまったのだが、入内を敢行した現世のかぐや姫桐壺の更衣は、そのかぐや姫性<sub>II</sub>異人性によって帝寵を一身に集め、「前の世にも御契りや深かりけん、世になく清らなる玉の男御子」光源氏を残して昇天<sub>II</sub>排除される。宮仕えの拒否／入内の敢行、一件まったく正反対・対照的な行動を執っているようでいて、結果的にはどちらも帝の〈性〉を独占してしまっているということ、侵犯の状況においては同一だと言えよう。以上が『竹取物語』から『源氏物語』へという王権侵犯のモチーフ・主題の生成・継承の見通しであるが、小稿の範疇を逸脱するので詳細は別稿に譲ることにする。<sup>(11)</sup>

### むすび

「あはれ」の主題がどのような経緯・理由で提示されてきたのかを述べてきた。『竹取物語』は、深層における異人の排除と追放を、話型を切り換え転換することで表層では「あはれ」の主題を生成し、それを騙ることによって別離を抒情化した文学である。ゆえにこの「あはれ」は、聞き手↓読者の同情と共感を呼ぶための演出であり、『源氏物語』の「あはれ」に直結する主題と理解するには、質的に無理がある。ただし、そのことは、『源氏物語』柏木の物語のプレテキストが『竹取物語』ではない、ということではない。柏木の物語は、前掲高田祐彦論文に代表されるように、明らかに『竹取物語』をプレテキストとして引用している。しかし、柏木の「あはれ」は、引用がなされた場、『源氏物語』じしんのコンテク

ストの機能によって差異化されたことにより生成したものであって、『竹取物語』の「あはれ」とはまったく異質である。『竹取物語』は、全編が一貫して駄洒落によるいかげわしい起源譚に終始した滑稽と風刺・アイロニーを旨とする文学であって、『源氏物語』のような「あはれ」の主題を語る文学ではない。むしろ、「あはれ」の主題を騙り装うことによって深層に王権侵犯のモチーフを内包するしたたかな文学なのであった。

### 注

- (1) 高橋亨「竹取物語論」『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会一九八七年。
- (2) 高田祐彦「あはれ」の相関関係をめぐって——『古今』『竹取』から『源氏』へ——『国語と国文学』一九九六年一月。
- (3) 東原伸明「研究史 源氏物語の〈語り〉と〈言説〉」三谷邦明編『源氏物語の〈語り〉と〈言説〉』有精堂一九九四年。
- (4) 三谷邦明「〈語り〉と〈引用〉——〈引用〉と〈排除〉あるいは竹取物語の方法——」『物語文学の言説』有精堂一九九二年。
- (5) 東原伸明「物語文学の言説」『時代別日本文学史事典 中古編』有精堂一九九五年。
- (6) 高橋亨「話型」『国文学』一九九五年七月臨時増刊号。
- (7) 三谷邦明「反転する竹取物語——「あなた」との対話あるいは竹取物語の方法——」『物語文学の言説』有精堂一九九二年。ほかに三谷の異郷排除の論は、「テキストの表層と深層——竹取物語の表現あるいは異郷の排除——」・「古代祭祀と文学——禁忌の違反あるいは排除の論理——」があり、どちらも同書所収である。
- (8) 小嶋菜温子「王朝のタタリ 日韓比較民俗学から」・「鎮魂の擬制」『富士の山』の祭儀。『かぐや姫幻想——皇権と禁忌』森話社一九九五年。
- (9) 今村仁司「暴力の社会存在論へ向けて」『暴力のオントロジー』勁草書房一

九八二年。

- (10) 高橋亨「ファンタジーとしてのかぐや姫」『季刊 i i c h i k o 特集ファンタジーの文化学』ピーターパン・モモ・かぐや姫 No 5、一九八七年一〇月。
- (11) 東原伸明「光源氏物語の始発とかぐや姫引用——王権侵犯の主題生成Ⅱ」桐壺の更衣から光源氏・藤壺へ』『印地』第一号 印地の会編（横浜市立大学三谷邦明研究室）一九九九年刊行予定。

(付記) 小稿は、一九九七年度「国文学特殊講義（中古）」の後期単位認定レポートの課題として作成したものに、一部加筆し成稿したものである。

（高知女子大学文化学部文化学科）